社会貢献フォーラム

主役はあなた！ 明日の街づくり

～社会貢献がつくる地域の活力～

社会貢献フォーラム「主役はあなた！ 明日の街づくり～社会貢献がつくる地域の活力～」（全日本社会貢献団体機構、奈良新聞社、全国地方新聞社連合会主催）が11月30日、奈良市三条宮前町のなら100年会館中ホールで開催され、約300人が参加した。元阪神タイガース選手で野球解説者の赤星憲広氏が「社会貢献にかける～野球を通じた恩返し～」をテーマにトーク。続いて赤星憲広、中山徹、相羽宗一郎、武智功各氏によるフォーラム「主役はあなた！明日の街づくり～社会貢献がつくる地域の活力～」が行われ、社会貢献活動を通して体験したことや感じたことを話し合いながら、活動の魅力や可能性について考えた。

トーク
社会貢献にかける
～野球を通じた恩返し～
赤星 憲広

トーク

社会貢献にかける

～野球を通じた恩返し～

元阪神タイガース／野球解説者
赤星 憲広氏
村松 真貴子氏
（アナウンサー・エッセイスト）

最初の一歩が大切

村松 タイガースを引退したときのことから。

赤星 2009年9月12日の横浜ベイスターズ戦で、右中間への飛球にダイビングキャッチを試みた際に負った、中心性脊髄損傷が原因で引退した。けがをしなければもっと長く現役でいられたと思うが、プロ野球選手としてはダイビングするしかなかった。捕球できなかったことが残念だ。

村松 著書を拝見すると、とても強い人だと感じた。

赤星 小柄なので相手に隙を見せると勝てない。だから強く見せてきただけ。選手時代、甲子園球場へ行くのに車で15分くらいの距離を、怖くなってUターンし、1時間くらいかかって着いたこともあった。タイガースファンからのプレッシャーがきついため、そんな気持ちになってしまう日もあった。

村松 ファンからのプレッシャーはそんなにきつかった!?

赤星 現役時代は心地よいプレッシャーだった。プロ野球選手は結果がすべてだから、常にプレッシャーがかかった状態でないと良いプレーはできないと思う。

村松 盗塁のたびに車イスを寄贈するようになったきっかけは。

赤星 母が病気がちで入院していたとき、「病院に車イスが少ないので1人1台は無理だ」と言われ、車イスをという意識はあった。現役2年目の時、ファンのある女性が骨肉腫にかかり、足の切断手術をするかどうか悩んでいた。両親に頼まれて「元気になって日本一になる姿を見てほしい。その代わり車イスを作って贈る」と彼女に約束した。車イスはできたが、その女性は亡くなり、葬儀の時に披露された。それがきっかけで、プロ野球選手として何ができるかと考えた末、盗塁が成功するたびに車イスを1台寄贈することにした。

村松 これまで寄贈した車イスの数は。

赤星 選手時代は301台。トータルしたら466台になる。ちなみに盗塁は381だが、最初の2年間は寄贈はしていなかった。

村松 盗塁に成功する秘訣（ひけつ）は。

赤星 盗塁とは人生のようなものだと思う。最初の一歩のスタートを切る勇気が大切だ。牽（けん）制されるのではないかと迷うと、いいスタートは切れない。人生の転機にも不安があると、なかなか最初の一歩を踏み出せないものだ。それは人が社会貢献活動をする場合も同じだと思う。

村松 車イスの寄贈のほかにも社会貢献をしていますね。

赤星 「Ring of Red 交野市チャリティーマラソン」を2012年から大会実行委員長として開催している。昨年は約6500人に参加していただいた。スポーツを通じて社会貢献をしていこうということで、参加者からも賛同してもらっている。来年は8000人を目指しているので、ぜひ参加してほしい。

また山添村で少年野球チーム「レッドスターベースボールチーム」を主宰している。中学生を対象にしたチームで、プロ野球選手を育成するというより、野球の底辺を拡大しておくことが大切だと思う。また礼儀やあいさつを身につけることなど、地域の清掃活動を通して、野球をしていたことが将来に役立ってくれたらいいと思う。

村松 野球を通じての社会貢献とは。

赤星 具体的には車イスの寄贈をしてきたが、これはプロ野球選手だったからできたこと。このほかにも、プロ野球を通じて多くの方からさまざまなものをいただいた。これをどのようにして社会に返していくかということだと思う。何か社会貢献活動をしたいと思っても、何をどうしたらいいのか分からないというのが現実だ。その中でスポーツを通じてできること、それが地域の活力につながればいいと思う。最初の一歩が大切。車イスを贈ることで喜びがあり、笑顔がある。たくさんの人に笑顔になってもらいたいと思って続けていきたい。

笑顔あふれる地域へ

■パネリスト
赤星 憲広氏（元阪神タイガース選手／野球解説者）
中山 徹氏（奈良女子大学教授）
相羽宗一郎氏（奈良県遊技業協同組合理事長）
武智 功氏（奈良新聞社論説委員）
■コーディネーター
村松真貴子氏（アナウンサー・エッセイスト）

中山 徹氏

相羽宗一郎氏

武智 功氏

赤星氏 貢献活動の輪を広げる

中山氏 学生と地域ともに成長

相羽氏 人と人との助け合いを

武智氏 得意分野で継続が重要

濱川氏 災害復興へ野迫川PR

高原氏 商店街活性3つの活動

村松 どのような社会貢献活動をしているか。

中山 まずは奈良女子大学の学生2人から活動を紹介する。

濱川真衣 野迫川村で災害復興活動に参加した。

野迫川村は奈良県の南西部にある村で、人口約480人、高齢化率50％近くという過疎と高齢化に直面しており、とりわけ近年の人口減少率は全国市町村でワースト3位以内を維持する値となっている。

この村は平成23年に起こった紀伊半島大水害で被害を受けたので、復興の一助になればということで現地入りし、交流してきた。まず郷土料理研究会の協力のもと奈良市もちいどの商店街で野迫川村の郷土料理である芋もちづくりのPRをした。また、村で豊富に採れるスモモを用いた「スモモのソースかけ豆乳プリン」を試作し商店街でふるまった。また平維盛大祭でも交流した。

次に、「のせがわ田舎コン」で村の青年と交流し、村のPRビデオの制作も手掛けた。

高原萌 奈良市の商店街活性化に取り組んでいる。3つの活動を報告したい。

まず、「あるくん奈良まちなかバル」の活動。これは客が5枚つづり3500円のチケットを購入し、奈良駅周辺にある店舗から特別に提供されるバルメニューを食べ歩くという企画。今まで行く機会を逃していた店舗や奈良の隠れた名店に足を運んでもらい、次回から利用しやすくなってもらうために開催している。この企画をよりよいものにして、持続的に行っていくためのアンケート調査を行っている。

第二に東向北商店街の魅力発掘ツアー。店舗に店の歴史や一押し商品をPRしてもらい、ツアー参加者とワークショップを行い自分たちや周辺住民が知らない情報を発掘した。

第三に三条通り商店街で留学生によるワークショップ。これは外国人目線で奈良の商店街について意見発表してもらおうというもので、たとえば日本人が見れば由緒ある古い看板が、彼らの目線では見栄えのしない汚れたものに見える、という意見が出たりした。また外国人の店舗利用も促進し、地元商店街を広く知ってもらう機会にした。

相羽 奈良県遊技業協同組合では、紀伊半島大水害で被災した1市2村に支援金500万円を寄贈した。また東日本大震災被災者支援の義援金300万円を日本赤十字社奈良県支部を通じて寄託し、災害時に要援護者を支援するために、県内の指定福祉避難所60カ所に非常用発電機を寄贈した。このほかチャリティゴルフコンペを平成13年から実施し、チャリティ募金、オークション募金を寄贈している。

他には、奈良県警が実施する空き巣などの防止を目的としたあいさつ声かけ運動「チャレンジ絆」の防犯シート作成のための資金を提供した。各戸の入り口に貼った結果、運動を行った地域では空き巣の被害件数が減少したと聞いている。

支援金だけではなく、地域の清掃活動などにも参加している。紀伊半島大水害の際には支援のため現地入りを申し出たが、道路が寸断されていたため断念した経緯がある。

村松 復興支援活動や商店街活性化活動に参加してどのような感想を持ったか。

濱川 「のせがわ田舎コン」で、実際に木を伐採する林業体験をメーンにしようと企画した。しかし周りの関係者から「危険だ」と言われ、なかなかうまくいかなかった。そこで村で林業をしている人に協力してもらい、参加者でも安全にできる丸太切りなどの企画を実現し、参加者に満足してもらえた。

村松 これらの活動を聞いて、何を感じたか。

武智 奈良女子大学の若い人たちによる活動に感動した。1人だと思い切れない時もあるが、仲間がいると勇気を出して取り組める。そして本人も、貢献活動自体も成長する。

相羽 支援金や義援金の寄託が活動の中心になっている。これでよいのかと悩んだこともあった。しかし組合員と意見交換をした結果、支援金や義援金の拠出も立派な社会貢献ではないか、社会貢献とは要は人と人との助け合いだから、組合としてできることをすれば良いと思うようになった。

赤星 私も奈良女子大学の活動は素晴らしいと思う。スモモプリンはもっとPRして、野迫川村を全国に知ってもらうべきだ。県遊技業協同組合の活動も、長年継続して取り組んでいる活動もあり、この点は評価されるべきだ。

もっと奈良県を知ってもらうべきだが、宿泊施設が少ないという印象を受ける。じっくりと滞在しないと、人と人の交流はなかなかできない。

相羽 そう言っていただいて勇気をもらった。防犯シートの作成協力では県警に感謝された。シートに記載された「向こう三軒 両隣 裏隣」というキャッチコピーは地域での親密な交流を表現していて好評だった。

中山 社会貢献とは、受け入れる側だけでなく活動している側にとってプラスになることが必要だ。学生たちも、やっている過程ではいろいろと苦労があった。その中から地域社会や現実の生活から多くのことを学んで成長していったと思う。

村松 自分も変わるし、相手も変えることができると思う。

武智 社会貢献活動は、人と人とを結ぶ力になる。地域共同体の人間関係が希薄になっているので、社会貢献の必要度が高まっている。助け合いは、人が生きていく原点だ。さまざまな立場、得意な分野で助け合っていくことと、継続していくことが大切だと思う。

赤星 「Ring of Red 交野チャリティーマラソン」を立ち上げたとき、最初から市民すべてが協力してくれたわけではない。毎年開催しているうちに趣旨を理解し、ボランティア参加者も増えていった。継続して取り組むことが重要だ。

中山 都市計画、すなわちまちづくりは、きれいで便利な街の形をつくればいいのではない。それも大切だが、最も重要なことは人づくりであり、住民が自分のまちを真剣に考えるようになることだ。

村松 話し合いを通じて最後に意見を一言ずつ。

武智 外国人目線では、奈良の由緒ある看板も見栄えがしないと言われたことは、貴重な発見だと思う。一過性の活動ではなく継続して取り組んでほしい。弊社としてもこのような活動を、プロセスも含めて持続して報道するようにしたい。

相羽 社会貢献活動はいかにあるべきか、今後における方向性を考えていくうえでたいへん参考になった。機会があればまた議論したい。

赤星 このような活動の輪がもっと広がっていくようにしたい。山添村で「レッドスターベースボールチーム」を主宰しているが、奈良県のために貢献できるようにしたい。

中山 奈良県は過疎地帯が多く、子どもができるスポーツが限られている。もっとスポーツに親しむ機会を提供してほしい。大学は今、教育・研究・社会貢献が3つの柱になっている。学生が社会貢献活動で地域に出向く機会が増えている。彼らを一人前の大人として扱い、厳しく接してほしい。そうすれば、学生も大きく成長していく。学生と地域がともに成長していくような社会貢献に取り組んでいくべきだ。

村松 元気の源は笑顔。笑顔のある地域を目指して共に頑張っていきたい。

村松真貴子氏

濱川 真衣さん

高原 萌さん

全日本社会貢献団体機構は
未来に向けて平和で住みよい
社会づくりをめざしています。

全日本社会貢献団体機構は、全国のパチンコ・パチスロホール組合の連合会組織である全日本遊技事業協同組合連合会（全日遊連）を母体として2005年12月に設立された任意団体で、学識経験者、文化人、政財界関係者が参加し、平和で住みよい社会づくりに貢献する事業への助成や社会貢献活動の顕彰を主な活動としています。

AJOSC

私たちは、社会に役立ち必要とされる研究や事業、活動をサポート・応援しています。

助成事業

今日の社会に最も必要とされる研究や活動に対する助成事業は、当機構の根幹事業です。毎年、子どもの健全育成、命を大切にする研究や活動、学術・文化の振興に関する活動に対し、助成を行っています。

◆平成25年度助成事業（実績の一例）

「福島県いわき市のコミュニティ再生＆強化、耕作放棄地を減らす」事業
－NPO法人 greenbird－

「フロアホッケーを活用したクラスの絆づくりプロジェクト」事業
－NPO法人 日本フロアホッケー連盟－

「キッズアートプロジェクトしずおか」事業
－Kids Art Project Shizuoka 実行委員会－

顕彰事業

会員の社会貢献活動を顕彰し、今後一層の活動を期待して、年間で最も優れた社会貢献活動に「社会貢献大賞」を授与することとし、平成17年から実施しております。

第7回 社会貢献大賞
「石巻湊地区ボランティア隊派遣」事業
東京都遊技業協同組合

第8回 社会貢献大賞
「社会的弱者への思いやり特別支援年・5年」事業
神奈川県遊技場協同組合

第9回 社会貢献大賞
「『兵遊協／障害者ぬくもり応援団』を中心とした障害福祉活動の推進」事業
兵庫県遊技業協同組合

全日本社会貢献団体機構 TEL.03-5227-1047 http://www.ajosc.org